

昭和四年（一九二九）ブロンズ、
総高五三・〇 鑄造

手にはその人の人生や苦勞が刻まれるとか、手の表情などと言って、人の手はあたかも顔と同義であるかのように扱われることがある。そのせいかどうか、近代彫塑のなかには手そのものを作品としたものが存在する。本作は、スッと空中に伸ばした左手の手首を曲げて、その親指に中指と薬指の指先を付け、残る人差し指と小指をまっすぐ伸ばした様子をブロンズにした作品である。この姿は影絵で狐を写し出すときのポーズなので、

だから作品名は《きつね》なのである。何とも人を食ったタイトルだが、作者は、大正・昭和初期の革新的な彫刻団体であった構造社に所属する中牟田三治郎（一八九二～一九三〇）である。天折の作家であったが、詩作や小説にも才能を発揮し、構造社同人の齋藤素巖からも「不遇な作家」であったと早世を惜しまれた。本作は昭和四年（一九二九）の第三回構造社展に出品後、秩父宮家に買い上げられ、雍仁親王が身边に飾られていた。



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

1920s-30s モダン・エイジ — 光と影の造型美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 70

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十七年九月十二日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sanmonmaru Shozokan